

# EurekaXIV

六年制通信 No.4 令和8年5月1日(金)号

## 心はからだの王

これは阿川弘之の『米内光政』に出てくる大好きな言葉ですが、最近「Perfect Days」という映画を観てまた思い出していました。今回は「足るを知る」ことの大切さも学んだように思います。この映画、監督がヴィム・ヴェンダースというドイツ人なので、驚きました。小津安二郎を大変尊敬しているとのことで、小津が「東京物語」の主人公笠智衆につけた平山という名前を「Perfect Days」の役所広司に与えています。この人も飛び抜けてうまい役者ですね。いつもながら感心します。映画のタイトルも、例えば幸せな日常という意味で「Happy Days」としてもよさそうなのに、なぜ Perfect を選んだのか、そんなことを考えながら二回程観ました。

東京の公衆トイレの清掃員が主人公です。彼は中年を過ぎているようですが、体力も気力も十分で仕事は丁寧です。おんぼろアパートに一人で住み、朝は誰かが外を履く筈の音で目覚め布団をあげ歯を磨き、仕事に出かけます。ドアを開けると必ず空を見上げ、微笑み、缶ジュースを買って車に乗り込みます。昼はコンビニで買ったサンドイッチなどを寺の境内で食べ、小さな苗木のようなものを見つけると住職に断り家に持って帰って育てます。寺の大木から降り注ぐ木漏れ日を写真に撮ることもあります。仕事が終わると銭湯に入り、どこかの駅の地下街で夕食をとります。そして帰宅。文庫本を読みながら眠りにつきます。こういう日常が淡々と規則正しく続きます。映画は丁寧に平山の毎日を追います。同僚の若い男が仕事もいい加減で、好きな女のために金が要るとかで平山にねだったり、そんなハプニングにも自分の日常を乱されることなく対応します。ある日姪が家出をしてきたとアパートにやって来ます。平山の妹の娘です。兄からの電話を受けて娘を引き取りに来た妹との会話で少しだけ平山の過去がわかります。妹の乗ってきた、どうやら運転手もいそうな高級な車や妹の発言から平山は昔成功したビジネスマンだったらしいことが。そして父親と何らかの確執があって家を捨てたこと。そして自分で今の仕事を選んだということ。だから、妹の帰ってきてほしいという言葉にも「できない」と答えます。

平山の日常にもほんのかすかな波風は立ちます。小さな揺れは起こります。しかし、彼は自分の選んだ生活を乱そうとはしません。満ち足りた表情で貧しい生活を淡々と続けます。ヴェンダースのインタビューを聴いたことがあります、ある僧侶をモデルにしたというようなことを言っていたように思います。修行僧ですね。そうであるなら、確かに彼らの目指す日常は Happy よりも Perfect がふさわしい気がします。私はこの映画で、自分の行動を支配しているのが自分の心であるということがいかに大切

かを学んだ気がします。しつこいけれど、日本人ではないのですね、この監督さん。

話は少し変わりますが、昔こんな話を読みました。ある商店街にタチの悪い若者が数人やってきて騒ぐのです。じゃまで仕方がないので店の主人が一万円を出して、これをやるからどこかに行ってくれと言います。彼らはわかったと退散するのですが何日かするとまた来て騒ぎます。店主は五千円を出して、これをやるからどこかに行ってくれと言います。彼らはわかったと退散するのですが何日かするとまた来て騒ぎます。店主は千円を出して、もうこれだけしか金がない、これが最後の金だ、これを持ってどこかに行ってくれと頼みます。すると若者たちは、これっぽっちで騒いでいられないと本当にどこかに消えてしまったそうです。これを読んだ時ゲラゲラ笑ってしまったのですが、これはアンダーマイニング現象というのだそうです。「土台を壊す、ひそかに弱める」という意味を持つ **undermine** から来ているのですが、自分の心からそうしたいと思ってする行動が、報酬という尺度を与えるといつの間にか変質してしまうという現象ですね。森沢明夫の『おいしくて泣くとき』にも「学歴よりも収入よりも大事なものは、自分の意志で判断しながら生きていくかどうかだ」という言葉があります。自分の行動を律するものが自分の心にしかない時、私たちは本当の意味で生きていくということなのでしょう。「Perfect Days」の平山も学歴や収入という尺度を捨てて自分の一日の行動を自分の意志で支配しています。さて、はたして君たちのような若者の目に平山の日常（人生だね）がどう映るのか、感想を聞いてみたいね。

#### 今週のおすすめ

・米澤穂信 『氷菓』 （角川文庫）

米澤さんの本は何冊か読んでいますが、正直に言うと私の好みと評価の分かれる本が結構あります。評判になった『可燃物』は残念ながら面白くなかった。これまでに二重丸をつけた作品は『追想五断章』、『儂い羊たちの祝宴』、『満願』などです。特に『満願』は私の中のベストですね。好きな作家の割にデビュー作の『氷菓』をちゃんと読んでいなかったことを思い出して、今回通読しました。

折木奉太郎が神山高校の古典部に入部する所から物語が始まります。それも世界中を旅する姉からの手紙で命令されてのこと。古典部を潰してはならぬゆえ、お前が入部しろと。同級生の千反田える、福部里志、伊原摩耶花とともに古典部復活。

ある日折木は千反田から相談を受ける。これが本書のキモです。千反田の伯父である関谷純が幼稚園児であった彼女に言ったことを思い出させてほしいという依頼というかお願いします。は？何の話？どういうこと？となりますよね。

関谷純も神山高校の古典部に入っていたらしい。とにかく何か手掛かりはないものかと彼が在学していた頃の文集を探す。創刊号はなかったが第 2 号が見つかり表紙には「氷菓」というタイトルが。さらに、どうも 33 年前に文化祭をめぐる何かの事件があって、関谷純が何らかの理由で退学になったのかもしれない、そこまでわかってくるのだが…。なかなかキャラが立っていて面白いですが、デビュー作っぽい作品だな。

BGM は DREAMS COME TRUE の 何度でも でした…。